

特別賞 NHK福井放送局長賞

ブルーリボン

小浜市立小浜第二中学校 3年 新谷 輝

夏休みに図書館のロビーで、青い布と安全ピンを持っている男の人に、話しかけられた。「小浜のAさんが朝鮮に拉致されていたのは知っているよね。市役所では、拉致問題を解決するため、学生さんにもこれをつけてもらおうと配っているんだよ。」

Aさんが帰国しても拉致問題は全然解決していなくて、こうやって地道に啓発運動をしている人がおられることに、はっとさせられた。この小浜でも起こった拉致問題について、ぼくはもっとよく知るべきだと思った。パソコンで調べていくうちに「めぐみ」というビデオに出会った。両親、双子の弟と家族5人で幸せな普通の暮らしをしていた横田めぐみさん。中学校の部活動の帰りに突然、姿を消した。誘拐や交通事故、家出、自殺など、あらゆる事を想定して捜査を進めても見つからない。この時、日本海の向こうの北朝鮮に無理矢理、連れていかれたとは誰が想像しただろう。この時、めぐみさんは北朝鮮の工作員に連れ去られ、北朝鮮に向かう船倉の中で泣き叫び、あちこち引っかいた爪は血だらけだったそうだ。強引に、一人見知らぬ所に連れて行かれる恐怖はどんなものだっただろう。我が子の行方、生存も分からず、30年以上も悲しみ、苦しんだ家族のことを思うと、ぼ

くは、激しい怒りを覚えた。許せない事だ。

自分で自由に生きていくというかけがえのない人生を奪われ、その家族も激しい悲しみのどん底につき落とす。拉致は完全な人権侵害であり、日本という国の主権まで侵害している。なぜ、このような非人道的な事を、北朝鮮は平気でできるのだろう。

北朝鮮は、韓国も含めて朝鮮半島を統一しようとするため、スパイを送りこむことを考えていた。しかし、韓国人をよそおって韓国にスパイを送りこむことが難しかったので、日本人をよそおって韓国にスパイを送りこむ方法を考えついた。そこで、北朝鮮のスパイをその日本人になりすまさせたり、朝鮮のスパイに日本の習慣や日本語を教える先生にしたりしようとして、日本人を拉致したというのだ。北朝鮮という国の卑劣で傲慢な政策、意思によって日本に暮らす何の関係もない人のごく普通の幸せがこわされている。

1970年以降から80年頃にかけて、失そう事件が相次いでいたが、北朝鮮による日本人拉致だったのである。現在、17名が政府によって拉致被害者として認定されている。平成14年9月に、北朝鮮が日本人拉致を認め5人の被害者が帰国したが、他の被害者については、未だ北朝鮮から納得のいく説明を受けていない。話し合いも進展していない。

今は「拉致問題」というように、日本でも国際社会でもとらえられるようになってきている。しかし、それまで拉致被害者の苦しみは、誰も分かっていなかったと思う。横田めぐみさんの御両親が、なりふりかまわず街中でビラを配り、みんなに訴えていた時も、世間の目は冷たかった。けれど、あきらめずに運動し続け、総理大臣やアメリカの大統領にも訴え続け、ようやく国際的な問題として、とらえられるようになってきたのだと思う。国が動いてくれなければ、個人の力ではどうにも解決できない問題はたくさんある。しかし、そ

の個人があきらめずに運動し続けたから「拉致被害者の会」もできた。さらに、平成18年に「拉致問題その他北朝鮮当局による人権侵害問題への対処に関する法律」が施行された。毎年12月には「北朝鮮人権侵害問題啓発週間」が実施されるようになった。ここまで進展するのに30年から40年もかかっている。それまでの家族の孤独な戦いを思うと、相当長い年月が過ぎてしまったのだ。

ぼくが渡されたブルーリボンは、拉致被害者の救出を求める運動の中で発案されたものだそうだ。日本と北朝鮮をへだてる「日本海の青」、被害者と家族を結ぶ「青い空」をイメージしているのだそうだ。そして、何より「北朝鮮による拉致被害者の存在と救出を信じている」意志表示の印なのだと感じた。家族を、人生を奪い去った北朝鮮による拉致。ある日突然連れ去られ、今も救出を待ち続けている。それが、もし自分だったら、自分の家族だったらと思うと無関心ではいられない。

めぐみさんの母親の「北朝鮮では盗聴器や隠しカメラを恐れながら、間違いをしないように一生懸命がんばってくらしていると思うので、大自然の中で、自由だよーと言わせてあげたい。」という言葉が強く心に残った。家族と一緒に暮らせて友だちと一緒に部活や勉強ができるという当然に思っていた月日が改めて大切な幸せなのだと実感させられた。

拉致問題は国連でも重大な人権侵害として理解と支持を得ている。そして、日本人のプライド、絆、優しさを試されている問題だ。外国に頼るだけでなく、日本人が団結して何をすべきか考え救出しなければと強く思った。